

思い出作りを考える

野島久雄

1. はじめに

一世代前と比較しても、私たちの個人的な情報記録の方法は多様化するとともに、容易なものとなった。30年前に日常的にカメラを持ち歩いていた人はいなかった。友人との手紙のやりとりをコピーして保存している人はめったにいなかった。しかし、今では大学生に聞いてみても、自分が赤ちゃんだった頃のビデオ、小学校の運動会の記録ビデオを持っていない学生の方が少ない。さらに、インターネット上で提供される各種の無料サービスのおかげで、私たちは個人的な情報を保存し、公開して共有するための仕組みも手に入れることが可能となっている。

その一方で、せっかく撮った写真やビデオがほとんど撮りっぱなしのまま、活用されることもないということもよく聞く話である。また、パソコンや携帯電話に代表されるように、情報機器の個人所有が進むことによって、写真を含むさまざまな情報が個人に閉じたものになりつつある。

その一方で、思い出づくり研究所が実施した「写真と思い出に関する意識調査」の結果から明らかなように、思い出を大切と考える人、また、その思い出のために写真が重要な役割を持っていると考える人は多い。そこで、本研究においては、以下の3点をあきらかにすることを目的とする。

(1) 思い出の危機にどう対応するか

デジタルメディアの信頼性に対する危惧、情報機器の個人化にともなう思い出の個別化

(2) 思い出の価値をどう考えるか

思い出は、それを大切と考える人がいて初めて「思い出」となる。そうした思い出が重要であること

(3) 思い出保存の手法

情報化が進んだことにより写真、ビデオ、メール、Web など個人の思い出情報は厩大になったが、それをどのように整理したら良いのか

以上の3点を考察する前に、まず、思い出とは何か、何故それを現時点において取り上げるのかについて明らかにしたい。

2. 思い出とは何か

2.1. 記憶研究の歴史から

思い出というのはごく普通の生活の場に出てくる言葉であり、私たちにとって身近な言葉であると言って良い。私たちは、思い出は私たちの過去の記憶に関わる事であると言うことを知っている。しかしながら、人の記憶に関する心理学の分野の研究においては、「思い出」はあまり研究テーマとなっていなかった。

2.1.1. 科学的な記憶研究の始まり

科学的な心理学の分野で記憶研究が始まったのは、19世紀末のドイツのことである。心理学者であったヘルマン・エビングハウス(1885年1月24日-1909年2月26日)は、XAM、YARのような意味のない単語を記憶して、それがどのように忘却されるかを研究し、そのほとんどが記憶した直後に忘却されるが、1日経って覚えている少数の単語はかなり長期間に渡って記憶されるという「エビングハウスの忘却曲線」を見いだした。

何故エビングハウスは、「無意味綴り」という意味のない単語を実験に用いたのだろうか。なぜ「リンゴ」や「たまご」のような見慣れた単語を使わなかったのだろうか。それは、「リンゴ」のような言葉には既に私たちが生活の中で様々な意味や価値を付加してしまっているため、記憶のメカニズムそのものを明らかにするには不適切であると考えられたからである。彼の記憶理論は、人の記憶があるものと、もう一つのものと同時に生起することによって結びつくという「連合説」(Ebbinghaus, 1885/1978)である。しかし、考えてみれば、私たちが「思い出」と考えているものは、まさに過去の出来事に意味や価値を付加したものに他ならない。そうした価値や意味を含んだ私たちの持つ記憶はいったいどのようにして作り上げられるのだろうか。

2.1.2. 偽りの記憶

1990年代に「偽りの記憶」がアメリカにおいて問題になった。鬱病などのメンタルな病気になった人がカウンセラーにかかる。そしてカウンセリングを行っているうちに患者は幼児期に(多くの場合)親から虐待を受けていたことを「思い出す」のである。アメリカでは虐待を受けたと主張する子どもが実の親を告訴し、無実を主張する親との間で争いになると言うことが頻発した。心理学者のエリザベス・ロフタスは、この虐待の記憶は「偽造されたもの」であると考えた。カウンセラーの誘導に応じて患者が偽りの、しかし極めて詳細で一見リアリティのある記憶を作り上げてしまうのである。

それを実証するためにロフタスが行ったのが、「ショッピングモールでの迷子」の記憶実験である。実際には迷子になったことがない人に対して、「小さな頃に家族でショッピングモールに行ったときに迷子になって、みんなが大騒ぎになった」ことを覚えているかと尋ねると、その人はそれが実際に自分の身に起こったことであると思い込み、「僕のことを見つけてくれたお爺さんは優しくな人で、帽子を被っていた」というような詳細な「記憶」までも思い出したのである(Loftus, 1998)。

私たちの記憶が必ずしも明確なものではなく、他の人からの情報や思い込みなどによって大きく変更されるということはよく知られるようになってきた。裁判などにおける証言の信頼性についての研究も進みつつある。実際に起こった事実は、必ずしも正しく記憶されているとは限らない。

実際に私が迷子にならなかったとしても、私の中にある「迷子になってとても不安な思いをした」という思い出があることがある。これにはどういう意味があるのだろうか。

前述のロフタスの実験で重要なことは、「迷子になった」という思い出は、実験者から提示されたきっかけから生み出されたものであるが、それが詳細化し、リアリティを増していくのは、人に語るというプロセスがあったからである。思い出とコミュニケーションには深い関わりがあるようだ。そこで、私たちは、「思い出を語る」というコミュニケーション機能に注目をした取り組みをしている。

2.1.3. 回想療法と思い出

なお、思い出が現在、心理的な療法として重視されつつあることについてもここで触れておきたい。

1980年代後半から、リハビリの手法として「回想療法」がイギリスで開発され、日本でも広まりつつあった。これは、バトラー(1963年)が人生における振り返りの意義を「Life Review」という言葉で提案したことから始まる。日本における第1人者である黒川由紀子氏は『百歳回想法』という著書を出版(2003年)している。これは100歳になったお年寄りを集めて話をしてもらった記録である。一見、よぼよぼで倒れそうなおじいちゃん、おばあちゃん達が、実は昔ホッケーをバリバリやっていたとか、長いこと高校教師で今でも論語をすらすらと暗唱できるとか、そういうことが分かってくる。話しているうちに、話し手もイキイキとしてくる。介護する立場から見てみると、労ってあげていると考えていた相手の人たちが、実はまだまだ豊富な能力を持っているということが分かり、自然と相手への敬意も生まれ、介護の質も向上するのである。これらの事象からも、思い出は単なるノスタルジーに留まるものではなく、リハビリや治療などにおいても重要だということが判明している。「回想療法」は、昔はリハビリには適切ではないと言われていた。介護療養型病院(俗称:老人病院)やリハビリ施設では、「昔のことにこだわるのは止めて、これからのことを考えましょう」というように思い出はネガティブに捉えられており、昔話を長々と語るというのは現実に適応していない証拠だと思われるのである。しかし、ここ10年のあいだにその認識は大きく変わり、「回想療法」も健康保険の対象となる治療法と認知され、広く用いられるようになってきている。

このように、思い出は、実際に役に立っているのである。

2.2. 思い出とは何か

「思い出」というと過去の出来事の記憶と考える人が多い。しかしながら、既に述べたように、思い出は過去に起こった出来事の記憶そのものではない。また、思い出は過去のみに関わるものでもない。今の私を形作るものであり、未来の自分を方向付ける情報でもあるからである。

また、それは必ずしも真実でなくてはならないということもない。私たちは、夕焼けを真っ赤だと思う。しかしながら、実際に写真を撮ってみれば分かるように、夕焼けの色は黄色とオレンジ色に近いものである。しかし、私たちの記憶の中に定着している夕焼けは真っ赤なのだ(これを心理学の専門用語では「記

憶色」と呼んでいる)。

ここでは、記録と記憶と思い出を以下のように区別したい。なんらかの出来事(イベント)があったとしよう。その時:

- ・記録: 客観的な外部メディアによって保存される情報。写真やビデオ、新聞記事、雑誌、インターネットなどに掲載することで定着された情報。異なる人が見ても同じものとして認識できる。
- ・記憶: 自分の中に残っている過去の体験や情報。同じ体験をした人々の間でも同じ記憶があることは保証されない。
- ・思い出: 記録や記憶を手がかりにして、自分が作り出す「物語」。

となっていると考えたい。したがって、思い出とは、

- a) 体験や体験の記憶そのものではない
- b) 現在進行中のものではなく、始まりと終わりがあるひとまとまりのものとして認知されているものであり、
- c) 人に語り得る形でまとまっているもの(実際に他者に話をするとは限らない)であり、
- d) 事実合っているかどうかは必ずしも問題とされないものであると考えている。

3. 3つの課題

3.1. 思い出の危機にどう対処するのか

思い出という言葉は昔からある言葉である。それでは、なぜ今になって思い出に注目するのだろうか。その理由の一つが、「思い出は危機にある」からである。

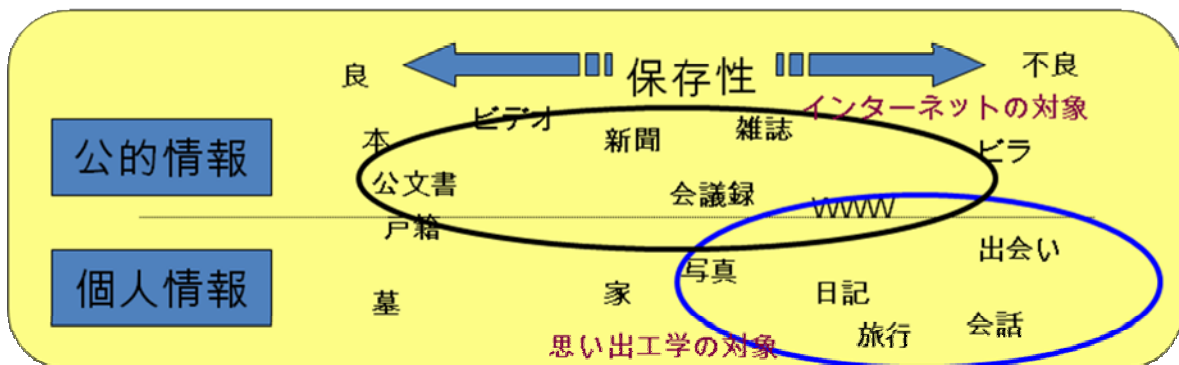
3.1.1. デジタル時代の思い出とその危機: 情報の消滅

思い出の危機とは、こういうことである。例えば、今、デジカメで撮った子どもの写真を30年後に見ることができだろうか。今の子どもに比べて、筆者が子どもだった頃には写真を撮られる機会は極端に少なかった。写真を撮って、写真屋さんに現像をお願いして、それをアルバムに貼り、そのアルバムは大切に保存されていた。アルバムの管理は、多くの場合母親の仕事だった。しかし、今の子どもの写真はどうか。ハードディスクやCD-ROMに入っているのではないだろうか。

「この前に行った家族旅行の写真を見たい」と子どもが思ったとしても、(おそらくは父親の)パソコンのハードディスクのどこにその写真が保存されているのかを探すことは困難だろう。また、30年後になったその娘が、自分の子どもから「お母さんの子ども時代の写真はどこにあるの?」と聞かれたとき、「おじいちゃんがパソコンの中に保存していたけど、それはもう見られないんだよ」とか、「20歳になったときにこの丸いものをもらったんだけど、これはCD-ROMといって、今では読めないんだよ」とかいうことになっていないとも限らない。

様々な情報のデジタル化の進展は著しい。しかし、それらの永続性ということに関しては大変怪しい点があるということはよく知られている(Rothenberg, 1995)。電子メディアの寿命は極めて短く、また一方で我々は日記、メール、ホームページなど様々な手段を用いて、思い出を断片として記録している。デジタル化が進んだことにより、昔に比べて膨大に記録することが可能となった。それ単独ではあまり意味がなく、なんらかのストーリーを与えることによって意味が生まれてくる。つまり、工学の技術だけでは思い出をきちんと保存できる仕組みを作らねばならないし、その思い出にストーリーを組み込めるような枠組みを作ることが大切なわけである。この2つを「思い出工学」と呼んでいる(野島, 2004)。

なぜそれを今やらなければならないのだろうか。現在、新聞記事をスクラップしておかなくても、ネット上のどこかにあることは容易に想像がつく。しかし、自分の情報こそが一番探しにくいものになっているのである。「私が3年前に書いた原稿はどこにやったんだっけ」となった時に、検索しても自分で管理していなければ出てこない。「思い出」というのは、「昔は良かったなあ」ということではなく、個人に属し、個人が管理し、個人が楽しむ情報コンテンツ(および事物)なのだ。それをうまく管理する枠組みを考える必要があるのである。「思い出」を取り扱うためには、工学的に言うと、どのように管理していくかという「記憶マネジメント」と、どのように見ていくかという「インタラクションシステム」が必要である。思い出そのものには、ライフストーリーなどの個人的なものから、社会にとって価値があったという社会的なものまで存在する。それぞれに関する技術の開発が現在必要とされているのである。



3.1.2. どう対応したらいいか

思い出を保存するための技術は既にある。静止画は JPEG で、動画は MPEG で、そしてテキストは ASCII 文字で保存すればよいのである。それらのフォーマットが一番普及していて安定して使えるものであるからである。また、ファイルはハードディスクがクラッシュするときに備えて、3つの異なる場所にコピーを保存しておけばよい。ハードディスクも安価になったし、オンラインストレージも使えるサイズと値段になってきたことから考えれば、以上の条件はさほどきついことではない。

工学的に考えれば、思い出の保存の技術は完成しているのである。ところが、実際には、そううまくはいかない。現在もハードディスクがクラッシュして大切なファイルを失うという事例には事欠かないし、20年前の PC98 で作成したフロッピーや MO ディスクが読めなくて困っている人は多いことだろう。また、カセットテープや 8mm ビデオ、さらには VHS ビデオでさえ、再生する環境が手元にないという人も多くなっ

てきている。

問題は技術ではないのである。思い出を保存することが重要であるという認識を持ち、そのための具体的な技術を手にすることが必要なのであると考えられる。

3.2. 思い出の価値はどこにあるのか

たとえば、小学校の時の林間学校という出来事は、それ自体としては単なる一つの事象でしかない。仮に友だちと肩を組んだ写真が残っていたとしても、何も気にせずゴミとして処分してしまう人もいるだろう。私たちがその出来事を思い出として大切に扱うにはそれなりの理由があるはずである。

3.2.1. 思い出の機能

近年の心理学では、人の個人史的な記憶を「自伝的記憶」と呼び、それがどのような特徴を持つものを明らかにする研究が進んでいる。それによれば、自伝的記憶には次の 3 つの機能があるとされる (Williams, et al., 2008)。

1) 指示的機能 (Directive)

指示的機能とは、自分の過去の記憶を現在および未来においてやる行動を参考とするものである。例えば、あるファーストフード店に初めて入ったときにどう振る舞うかは、似たようなファーストフード店での経験を思い出してみることによって分かる。このような自己の過去の経験は、行動を形成する上で役に立つのである。

2) 社会的機能 (Social)

自伝的記憶は他者とのコミュニケーションのために重要である。共通した過去の記憶(思い出)は、他者とのコミュニケーションを活発にし、結果的に社会的インタラクションを活性化する。自分の過去をさらけ出す(自己提示)ことによって、親密さを増すこともあるとされる。

3) 自己機能 (Self)

ある人の自伝的記憶は、その人の過去の出来事のデータベースであり、それがその人らしさを作り上げているのだとも考えられる。過去の記憶は、その人のアイデンティティそのものであるともいえるだろう。自伝的記憶の研究者は、この自己に関する機能がもっとも重要であると考えている。

3.2.2. コミュニケーションとしての思い出

筆者は、この自伝的記憶の社会的機能と自己機能こそが、思い出の中核的な役割であろうと考えている(野島、2004)。思い出を語るのは、まさに聞いてくれる他者の存在があるからであり(他者からの受容)、自分が何であるのかを確認するためであり(アイデンティティの確認)、過去の自分と今の自分、そして

未来の自分の統一性を保証するものでもある(アイデンティティの統合)。思い出話の持つ自己提示(self-disclosure)の側面は、コミュニケーションを活性化するということがよく知られている(山下・野島、2001)。

さらにもう一つ重要なことがある。思い出は共有されるものでもある。たとえば、父や母、兄弟との関係について考えて欲しい。私たちが親子、兄弟であるというのは、遺伝子でつながっているからそうなのではない。一緒に一つの家で暮らし、同じものを食べ、一緒に旅行をし、ケンカをし、そして慈しみ合うという具体的な記憶、すなわち思い出があるからこそ私たちの家族意識が生まれているのである。友人関係も同様だろう。同じ体験を共有し、同じ思いをもったということが友人関係を堅いものとするのである。

思い出が私たちにとって価値があるのは、思い出によってコミュニケーションが生まれ、思い出によって人間関係がより緊密になるからであり、またそうしたことを生み出す思い出自体を私たちが価値あるものとして大切にしているからなのである。

しかしながら、既に述べたように、デジタル化が進む現代、思い出は危機にある。その危機を救うためには、具体的な方策が必要になる。

3.3. 思い出をどう保存するのか

前述の意識調査内の設問「思い出をどのような形で残していますか」の結果から明らかなように、思い出は写真などの静止画で残している人が多い。また、写真が過去の出来事や記憶をよみがえらせるきっかけになるという人も多い。そこで、今回思い出の研究を始めるに当たって、思い出のためにより写真の保存と活用の枠組について検討することとした。

3.3.1. 写真の役割と動画の役割

写真の保存・活用について検討する前に、なぜ動画は思い出に向かないのかについて触れておきたい。

調査によると、「思い出をどのような形で残していますか」という問いに対して、紙・デジタルデータ・プリンタを含めた写真系が約 65%であったのに対して、ビデオ・動画などの映像系は 10%程度に留まった。また、「忘れていた過去の出来事や記憶がよみがえるきっかけ」となるのも、写真が 50%近くであるのに対して、映像系は、6%程度にしかない。

実際にインタビューをしても、写真は手近においておけるのに対して(手帳に挟んで、携帯電話の待ち受けとして…)、ビデオを撮った後は一度見ただけで二度と見ないという答えが多い。

	写真	スライドショー	ビデオ
形態	静止画	静止画	動画
時間コントロール	私	システム	システム
提示順序	自由/時間軸	時間軸	時間軸
鑑賞スタイル	のぞき込む	流し見	ソファでゆったり
語り手	私	私	登場人物
典型的な会話	「うん、それから？」	ちょっと待って今の	「ちょっと黙って」
情報の単位	1枚	全体	全体
再構造化・ 違う観点	可	不可	不可

この一つの理由は、思い出を語る場面での主導権のあり方があるだろう。既に述べたように、思い出の重要な機能は、他者とのコミュニケーションである。したがって、思い出の語り手が中心になって話が進まなければならない。ところが、ビデオなどの動画では(静止画を自動的に進めるスライドショーにおいても)、話し手は自分の自由に話を展開することができない。そうした問題が、思い出を語る場面における動画の扱い難さを生んでいるのだと考えられる。

3.3.2. アルバムシステムの崩壊

それでは写真をどのように扱ったらよいのだろうか。かつては、写真は、アルバムに貼って整理するものとされていた。写真を撮る枚数が極めて少なかった頃にはそれでも十分だったと思われるが、写真が日常化し、安価になってきて、限定された枚数のアルバムでは収まらなくなってきたのである。ナカバヤシという会社から、アルバムの枚数を増やすことができる「フェルアルバム」という商品が発売されたのが、1968年のことであり(ナカバヤシ、2010)、その頃から写真の枚数が増加しつつあると見えて取れる。

筆者の個人的な経験でも、紙の写真の管理は、写真がアルバムに貼られていた時代、ミニアルバム(写真を現像したときにカメラ屋がくれる冊子)に保存していた時代、写真を受け取ったまま、袋に入れっぱなしの時代という変遷を経ていて、1990年代に入った頃には、ほとんど整理しきれなくなっていた。

1990年代の中頃から、デジタルカメラが拡がり、パソコンの中にデータが保存できるようになった。個人的な感想だが、このとき、筆者は「これで写真の整理問題は解決した」と考えたことを記憶している。電子的なファイルとして管理すれば、全てうまくいくと考えていたのである。

しかしながら、それは実際にはうまくいかなかった。デジカメで写真がたくさん撮れるようになる一方で、コンピュータ上の写真(ファイル)管理は必ずしもうまくいかなかったからである。

3.3.3. 枠組の重要性

それではどのようにしたらよいだろうか。一つの考え方としては、私たちが思い出を一連の完結した出来事、一つのまとまりとして記憶しているように、写真も一つのまとまりとしてしまえばよいのではないか。

徳村・野島(2001、2002)と野島(2009)は、調査参加者に自らを含む写真のセットを持参してもらい、その写真ついて語るという取り組みを行った。そこで明らかになったのは、思い出の語り手は、写真という道具を使って自分の語りたい物語を語っているということである。前者ではコンピュータ上の画面、後者では8枚という限定された枚数のセットに限定することによって、制約を付けているのである。

枚数を増やすことが思い出を豊かにするとは限らない。記憶研究の歴史の中でも、私たちの知識が「スキーマ」と呼ばれる知識のまとまりを核にして出来上がっているということが示されてきた。

小説に起承転結があり、ワンパターンといわれる展開があるように(ワンパターンは必ずしも悪口とは限らない)、私たちにとって思い出をうまくまとめるような知識の枠組があると考えられる。

3.3.4. 価値付けの重要性

それでは、その枠組を私たちはどのようにして選ぶのだろうか。また、ある枠組を選んだとして、その中で何を重要な山場に設定するのだろうか。

情報整理についての様々な研究の中で指摘されることの 하나가、情報の価値判断の重要性である。現在のような情報化の時代では、ありとあらゆる情報を入手し、それを保存することが出来る。一度旅行に行っただけで、デジカメで数百枚もの写真を撮るというのは珍しいことではない。しかしながら、そのままでは何が重要かが分からなくなり、結果として情報の海の中に埋もれてしまうだろう。スタンレー・ミルグラムはこれを「情報過負荷 information overload」の問題であると考えた(Milgram, 1977)。

この情報過負荷に対処するための方法の一つとして、思い出に価値付けをすることが考えられる。たくさんある写真の中で後になったときに重要なものとそうでないものがあり、それを判断する必要があるということである。ところが、多くの場合、人はその判断が得意ではない。したがって、捨てるべき情報と残すべき情報の判断が付かなくなり、整理が出来なくなる(また、逆に、捨てるべきでない情報も捨ててしまつて後で困る)。その判断の基準を明示した整理の実践法として特筆されるのは、辰巳渚の『「捨てる！」技術』であった(辰巳、2000)。辰巳の考えは、「捨てる」方向に偏りすぎ、立花隆(2001)からの反論(同書中の『「捨てる！」技術』を一刀両断する)もあるが、情報整理の基準を明確にすることが情報整理のためには重要だという観点は貴重である。

4. 検討課題

思い出づくり研究所は発足したばかりであり、私たちの生活にとっての思い出の重要性を考えると同時

に、検討すべき課題は数多い。着実に進めていきたいと考えているが、当面は、写真と思い出の関係に着目して研究を進めていきたい。具体的に取り組むのは以下の2点である。

4.1. フォトブックの文法の検討

思い出を保存するためには、何らかの制約が有効であろうと述べた。一つの方法は、思い出をひとまとまりのパッケージとしてしまうことであろう。写真をひとまとまりにするための道具としては、アルバムがあるが、やや対象とする時間が長すぎる。ここでは、ひとまとまりの写真のセットを一冊としてまとめる「フォトブック」を対象として選ぶことにした。

フォトブックは、複数の写真を一冊にまとめるための仕組みであるが、枚数に上限があり、また、写真の見せ方にも(多様性はあるにしても)制約がある。そこで、フォトブックを対象として、

- ・普通の人にはどのようにフォトブックを作っているのか
- ・フォトブックを作り慣れている人と作り慣れていない人ではどこが異なるのか
- ・優れた(印象に残る、感動を生む)フォトブックとはどのような特徴を持っているのか
- ・フォトブックにも起承転結のような文法はあるのか、それを学べば誰でもよいフォトブックが作れるようになるのか

などについての検討を行う予定である。

4.2. 思い出の価値付けは可能か

たくさんの写真からいくつかを選び出し、何らかの制約・文法に従ってフォトブックは作れるとしても、そもそもどんな写真でどんなテーマでフォトブックを作ったら良いのかはまだ明確とは言えない。

例えば、山登りをした記録をまとめようとしたときに、頂上での写真を撮り忘れていたとしたら画竜点睛を欠くことになるだろう。しかしながら、私たちの思い出のイベントの記録は得てしてそうした重要な場面を記録し損なうことも多いこともまた確かである。

そうした思い出を記録する枠組として、私たちの生活の中では、冠婚葬祭のようなイベントがある。たとえば、子どもが生まれた後の誕生日、七五三などがそれにあたり、そうした場面での写真の記録は重要な思い出の一側面となるのである。

このように私たちの生活の中で記録しておくの良いもの、保存する価値のあるものについての一般的な基準を明らかにすることは可能だろうか。この考え方を進めれば、例えば、今住んでいる家、通っている学校の写真を撮っておくことが、後の思い出にとって有用なものになるということが予測できるようになるかもしれない。言わば、様々なものに思い出の(潜在的な)価値を与えるというものである。

もちろん、こうした価値付けは個人的なものであることもあり、その人にとっては重要だが他の人には分からないものもあるだろう(例えば、「大切な人からもらった本」は、単なる本とは異なる意味合いを持ち得る)。従って、全ての人に対していつでも通用する尺度にはならないかもしれないが、多くの人の大抵の場面で役に立つような評価基準を考えることができるのではないだろうか。また、それによって人が思い出の価値を見直すようなきっかけになるのではないかと考えている。

4.3. まとめ

先に述べたように、思い出づくり研究所の取り組みは始まったばかりであるが、この情報過多の時代における思い出を保存し、活用するための仕組みを考えていきたいと思っている。さらに、思い出をフォトブックのような形にし、その中に価値を見いだしていくためには、そのフォトブックを見せる相手、フォトブックの中のストーリーを聞いてくれる相手の存在が重要になる。私たちはその人に見せようとして、思い出をまとめるのであり、その人に語ることによって思い出はさらに価値を持っていくのである。そうした語りは、おそらくまずは身近な人、家族や友人に向けられるはずである。フォトブックを通した思い出の語り、この情報化・個人化が進む中での人間関係の再構築につながる一助となればと考えている次第である。

5. 参考資料

- Butler, R. N. (1963). The Life Review: An Interpretation of Reminiscence in the Aged. *Psychiatry*, 26, 65–76.
- Ebbinghaus, H. (1978). 記憶について 実験心理学への貢献 (宇津木保・望月衛 訳). 東京: 誠信書房(原著1885刊).
- 黒川由紀子 (2003). 百歳回想法. 東京: 木楽舎.
- Loftus, E. F. (1998). 偽りの記憶をつくる (仲真紀子約). 日経サイエンス編集部 (編), 別冊日経サイエンス 特集 脳と心の科学 心のミステリー (pp. 70–77): 日経サイエンス社.
- Milgram, S. (1977). *The individual in a social world: Essays and experiments*. Reading, MA: Addison-Wesley.
- 野島久雄 (2004). 思い出工学. 野島久雄・原田悦子 (編), <家の中>を認知科学する 変わる家族・モノ・学び・技術 (pp. 269–288). 東京: 新曜社.
- 野島久雄 (2009). 個人の思い出から社会の思い出へ 一思い出の心理学と博物館一. 歴博, 152, 12–14.
- Rothenberg, J. (1995). デジタル文書をどのように残すか. *日経サイエンス*, 25(3), 110–118.
- 立花隆 (2001). ぼくが読んだ面白い本・ダメな本 そしてぼくの大量読書術・驚異の速読術. 東京: 文藝春秋.
- 徳村篤志・野島久雄 (2002). 思い出コミュニケーションの活性化のためのカード型写真ビューアーのデザイン. Paper presented at the 日本認知科学会第19回大会.
- 徳村篤志・野島久雄 (2003). 思い出コミュニケーションの活性化のためのカード型写真ビューアーのデザイン (2). Paper presented at the 日本認知科学会第20回大会.
- 山下清美・野島久雄 (2001). 思い出コミュニケーションのための電子ミニアルバムの提案. ヒューマンインタフェースシンポジウム2001発表論文集.
- Williams, H. L., Conway, M. A., & Cohen, G. (2008). Autobiographical memory. In G. Cohen & M. Conway (Eds.), *Memory in the Real World* (Third ed.). New York: Psychology Press.